

## 入選

### 八本指のお父さん

奈良県 飛鳥中学校

二年 小倉 凧

一月。私のお父さんは、仕事中の事故で右手の人差し指、中指の第一関節までを切断した。

お父さんは、障がい者になった。

お父さんのお箸は、四角形の木製のものから六角形のプラスチック製のものになり、寝る前には右手を眺めるようになった。この前の三者面談では、右手を机の下に隠していた。

指を機械に巻き込まれて切った日、手術のために急きょ母が、隣の市にある病院に向かい、私は一人で夜を過ごすことになった。

次の日の朝、ふだんは起きたくない冬の朝も、「パツ」と目が覚めた。「おかえり」と声をかけながら、いつも母が寝ている部屋のドアを開けたが、母の姿はなかった。まだ暗い中、モヤモヤしながらテレビをつけて、母の帰りを待った。

手術後、入院中の父には大人しか面会が出来なかったため、私は電話とメールでやりとりをするしかなかった。しかし、ごく普通の父と娘で、むしろ思春期まっただ中の私には、入院中の父への接し方が全くわからなかった。

初めてかけた電話の父の声は、いつもの声ではなく、元気がないことが一瞬で伝わった。

「指どうやった？ くつつくん？」

「いや、もう無理やろ。これはあかんと思うわ。」

と、切断した指をくつつけるという希望も捨てたようだった。

父の気を紛らわすためには、どうしたらいいのだろう。

私は父に、あるドラマをおすすめした。そのドラマは、特に夢のない女性が、就職先で上司の雑用係をこなすうちに夢ができて、将来に希望を持つようになる、というストーリー。父にもマイナス思考にならず、前を見てほしいと思ったのだ。

また、悩みがあるときは、楽しいことを考える方が良いと思い、メールでは、傷や痛みに触れずに、苦手なものを食べた報告、家の前で取った月の写真などを送るようにした。

入院して10日後、父からメールが届いた。

「あのドラマの上司、怖いな。また見るわ。ありがとう。」

初めて言われた父の「ありがとう」が、私の心に響いた。

私のお父さんは、八本指。

八月。私のお父さんは、よく笑うようになった。